

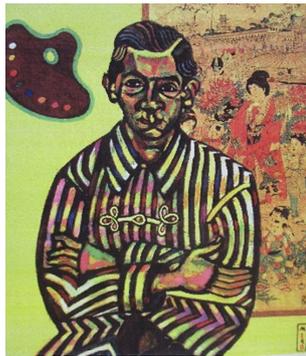
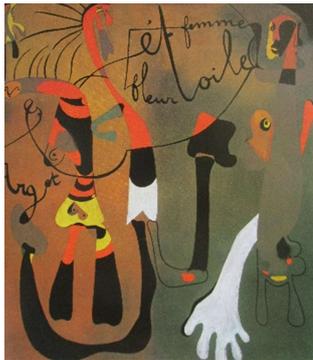
ミロ 展 ―日本を夢みて

Bunkamura ザ・ミュージアム(渋谷) 2022.02.11~04.17

愛知県美術館 04.29~07.03 富山県美術館 07.16~09.04

スペインの画家「ジュリアン・ミロ」(1893~1983)の名作の数々を、彼が愛した日本との関わりから紹介する初の企画展が全国3会場を巡回することで注目されている。展示される作品は、若き日の日本へのあこがれを象徴する初期作品から、1932年に日本で初めて紹介された画伯の作品など、油彩・素描・版画など約「60点」、陶・ブロンズの立体図「約10点」、資料「約50点」など合わせて「約130点」が一堂に会している。

更に、画伯が日頃アトリエに飾っていた「日本の民芸品資料」の里帰りや、実際に目にしたであろう「日本の美術品」や「日本の芸術家とのコラボレーション作品」などの展示もあり、「ミロ」の知らなかった一面に触れる恰好の機会となる、国内では20年ぶりの待望の「大規模ミロ回顧展」の開催である。



《絵画(カタツムリ、女、花、星)》

1934年 油彩/カンヴァス

画伯の夢のようなビジョンは、複雑な下地に塗料の艶出した層で出来ていて、構成要素の形状はしばしば気まぐれで、ユーモアがあり、折曲があつていたずらに歪んだ動物の形や、ねじれた有機の形状となっている代表作である。

《アンリク・クリストフル・リカルの肖像》 1917年 油彩/カンヴァス

非常に荒々しいタッチで、さまざまな手本をもとに制作されている。

まず、色調はフォーヴィスムから借用し、黒い線で協調された手や顔の表情や眼つきの鋭い顔は「ゴッホ」の作品によく似ているようである。

《パイプ煙草を吸う男の頭部》 1925年 油彩/画布

いたずらっぽくて暗示的な表現は画伯の得意であり、それによって「ミロ」の絵は造形性以上のものを訴えるという。大きな眼の卵形の頭部の男が、パイプをくわえて先端が少し赤くて黄色の煙をはく、正面から見られた胸は赤い図形が二つあるがこれは肺であろうか、実にユーモアがあふれる人物画である。